

卒塔婆小町

へ身は浮草を誘う水 身は浮草を誘う水、なきこそ悲しかりけれ

へ都は人目つましや、もしやそれかと夕まぐれ 月もろともに 出でてゆく

鳥羽の恋塚秋の山 月の桂の川瀬舟 憂き身につもつていつしかに
ももとせ

百歳の姥になりて候よ 姥になりて候よ

へあまり苦しう候ほどに これなる朽木に身をゆだね 息をつかんと 休らへば

へのう 心なの乞食や 腰をかけたる朽木こそ 朽木と見ゆれ 仏体を

写して刻める像なり かたち 疾くとくそこを立ち退き候え

へわれも賤しき埋木なれど いや うもれぎ 心の花のあればこそ かく永らえてあるものを

へさて仏体の謂れやいかに

へそれ卒塔婆は金剛薩埵 こんごうさつた しゅつけ 仮に出化し給いて 三摩耶行を行い給う さんまやぎょう

へ行いなせる形やいかに

へそれこそ地水火風空なり

へ五体五輪は人の体 なにしに隔てあるべきぞ

へ形はそれ たがに違わずとも 心の功德は変るべし

へさて卒塔婆の功德はいかに

へ一見卒塔婆 ようつり 永離三惡道

へ一念發起 菩提心

へそも菩提心なきゆえに 仏体をも知らざらめ

へそを知ればこそ 卒塔婆に即ちわれは 近づきたれ

へさらばなど禮 らいをばなさで敷きたるぞ

へとても臥したるこの卒塔婆 身を委ぬるも仏縁なり

へそは順縁に外れたり

へ逆縁なりと浮かむべし

だいば
へ提婆が悪も

へ観音の慈悲

はんどく

へ槃特が愚痴も

へ文殊の智慧

へ悪というも

へ善なり

へ煩惱というも

へ菩提なり

へまこと悟れる乞食なり 如何なる人の末なるかと 心を尽くし 問いければ

へのう懐の面影や なつかし 在りし日の君の姿や

へ百歳に二歳たらぬ九十九髪 ももとせ ひとつせ つくもがみ

へおもいつつ 寝ればや人の 見えつらん 夢と知りせば 覚めざらましを

へうたた寝に 恋しきひとを 見てしより 夢てふものを たのみそめてき

へあら うたてなの男ごころや

いざさらば いざさらば ころばえに 百夜があいだ二夜とて かずをたがえず御通い候え

へ百夜百草かよい路に 誠をあかし給わらば われもこころの雲晴れて 結ぶ縁や 夜半の月

へその一念の積りつもりて くじゅうくよ 九十九夜とぞなりたるに 夜明を待たで玉の緒の 切れてはかなくなり給う 切れてはかなくなり給う

へ一人この世に永らえて 世に住む日々のあさましや 花の盛りに死したるは 匂うがままの面影に 不老世界にあるものを 髪は霜枯 肌はまた のがるすべなき老醜を ながめせしまの地獄なり

へのう まろうどよ かくばかり

野末の花の色なきを せめてあわれと おぼしなば 賤がひとふし連れ給え

へ霜夜さむしろ二夜の情け かいな おいき 若き腕は老木の杖よ

そんなれそれそれ 老いの杖

ひと夜ひと夜さ 野も瀬の宿に 君が情けは老木の夢よ

そんなれそれそれ 老いの夢 しどもなや

へ花の色はうつりにけりな いたずらに わがみよにふる ながめせしまに